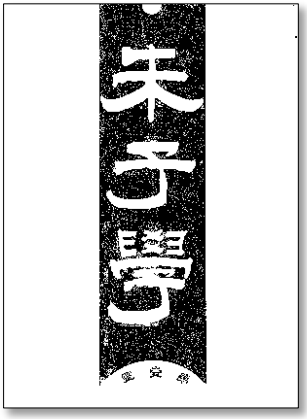
鹿沼に生きた人
生きている本

第３号

～鈴木石橋　その２・石橋は大政奉還・天皇制による平和国家樹立の夢を見たか？～



…石橋は、昌平黌の正学である朱子学を修めた、いうなれば幕府体制派学者でもある。このような石橋の下（もと）から、行動的であり、尊皇論者である蒲生君平や蜂岸休文などが、なぜ生まれたのであろうか。（中略）君平や休文等が石橋から受けた感化は、ひとり学問の点だけでなく、思想形成の上にも大きな影響を及ぼした。それは、石橋の学んだ学問が昌平黌で受けた朱子学の枠をはみだし、国史に対する強い関心を抱き、陽明学へ深く傾斜していたからに外ならない。　　柳田芳男著『かぬま郷土史散歩』より

２０２０年９月

小さな旅クラブ　鹿沼

① 鈴木石橋の精神的支柱となった朱子学と陽明学について

５分でわかる朱子学！

朱子学とは

12 世紀の中国・南宋の儒学者だった朱熹（しゅき）によって構築された、儒教の新しい体系「朱子学」。この名称はもっぱら日本で使われていて、中国では朱熹の先駆者である北宋の儒学者、程頤（ていい）とあわせて「程朱学」と呼ぶのが一般的です。

朱熹は孔子に代表される古典や宋学に加えて、従来の儒学では考えられていなかった宇宙や世界などの概念を取り込み、儒教の再構築を図りました。

朱子学の基本は、世の中のすべてのものや事柄は「理」と「気」の 2 つからなるとする「理気二元論」というものです。「理」は万物がこの世に存在する根拠を指し、「気」は万物を構成する物質を指します。

両者はまったく別の存在ですが、お互いに単独では存在することができず、付かず離れずの距離で相互に作用しあう「不離不雑」の関係とされています。

また「気」は常に運動しているもので、運動量の大きな時を「陽」、小さな時を「陰」と呼びました。陰陽の 2 つの気が凝集して火・土・木・金・水の「五行」となり、その組み合わせによって万物が生み出されるとしたのです。「理」は根本的なもので、これらの「気」の運動に対し秩序を与える存在だと考えられました。

この「理気二元論」から朱熹が導き出したのが、「性即理説」です。「性」は人間の本質で、静かな状態のもの。「性」は「理」であるとしました。しかしこの「性」が動くことで「情」となり、動きが激しくなってバランスを崩すと「欲」になると考え、「情」は「気」であるとしています。

また「欲」は悪であり、人は絶えず「情」をコントロールし、「性」に戻す努力をする必要があると説いているのです。

朱子学の欠点、問題点とは

13 世紀のなかばになると朱子学は科挙試験に採用されるようになり、さらに明の時代には国家認定の学問となって中国で広く学ばれるようになりました。

しかしそれは、朱熹が目指していた学問の姿からはほど遠く、科挙に合格するための勉強となってしまいます。成績のよい者が優遇される学歴社会、官僚社会を生み出すもととなってしまいました。
また「理」や「礼」を重んじる朱子学は、統治する側にとって都合のよいものとされ、社会の秩序を統制するために利用されるようになってしまいます。
古来より中国では、「諸子百家」と呼ばれるほど数多くの思想や学説が許容されることで、社会が発展してきたという歴史がありました。しかし朱子学が広がっていくと、それ以外の学問が排斥されるようになり、思想統制の時代へと変わっていったのです。その結果、中国社会の停滞や、ゆるやかな弱体化に繋がっていったと指摘する専門家もいます。
また朱子学は朝鮮へも伝播し、朝鮮王朝の国家統治理念として用いられました。朝鮮は高麗時代の国教であった仏教を排斥し、朱子学を唯一の国家公認の学問とします。
朱子学を学んだ知識人層は両班（やんばん）と呼ばれる身分階層を形成し、仏教だけでなく同じ儒教の一派である陽明学さえも異端として激しく弾圧しました。朝鮮では中国以上に朱子学にもとづく社会の統制が強固になり、それがかえって朝鮮の近代化を阻む要因となったともいわれています。

朱子学はいつ日本にやってきた？江戸時代に与えた影響は

日本に朱子学が伝わってきたのは、鎌倉時代だといわれています。1199年に宋へ渡り、真言宗泉涌寺派の宗祖となる俊乗坊（しゅんじょう）によって持ち込まれたというのが一般的な説です。
鎌倉時代の後期には、五山を中心とする学僧たちの基礎的な学問として広がっていたよう。後醍醐天皇や楠木正成も熱心に学んでいて、鎌倉幕府の滅亡から建武の新政にかけて、朱子学にもとづいていると考えられる行動が多く見られました。
室町時代には一度下火になりますが、江戸時代に入ると初代将軍の徳川家康に登用された林羅山（はやしらざん）によって再興され、幕藩体制の基礎理念として幕府公認の学問となります。
5代将軍の徳川綱吉は、朱子学を講じる湯島聖堂を建設。さらに11代将軍の徳川家斉に仕えた松平定信が「寛政異学の禁」で朱子学以外の学問を規制するなど、日本における全盛期を迎えます。

しかし皮肉なことに、幕府が後押しをしたことで「天皇を中心とした国造りをするべきだ」という尊王論が起こり、倒幕へと繋がっていくこととなりました。

朱子学と陽明学の違いとは

朱子学とよく対比されるのが、中国の明代に王陽明が起こした「陽明学」です。朱子学が唱える「性即理」に対し、陽明学は「心即理」という考え方を唱えています。
「心即理」は、南宋時代の儒学者・陸象山（りくしょうざん）が定義したもので、朱子学が心を「性」と「情」に分け、「性」こそ「理」としたのに対し、心は分けるものではなく、「心そのもの」こそが「理」だとました。
わかりやすくまとめると、朱子学は「知の学問」で、陽明学は「心の学問」ともいえるでしょう。
権威に従い、秩序を重んじる朱子学が統治者に好まれたのに対し、権威に盲従するのではなく、自分の責任で行動する心の自由を唱えた陽明学は、自己の正義感に捉われ、秩序に反発する革命思想家に好まれる傾向がありました。
日本においても、大塩平八郎や吉田松陰、高杉晋作、西郷隆盛などが陽明学の影響を強く受けていたといわれています。（“ホンシェルジュ”より）

② 郷土史家による鈴木石橋の紹介。

柳田芳男『かぬま郷土史散歩』（晃南印刷・平成３年４月 28 日発

３、鈴木石橋

城下町でもない地方の一宿場町から、しかも宿場の上層階級にも属さない一介の農民が、近世の最高学府である昌平黌（しょうへいこう）に入学した背景は何であったか。また、昌平黌で受けた教育の成果が、その地域（郷土）にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

鹿沼から昌平黌に入学した人物は、鈴木石橋、松亭、文平の鈴木家三代と一族の鈴木俊益だけで、下野では、武士階級以外ではほかに約 6 名を数えるのみであった。

鈴木家は、石橋町で代々農業を営み、大坂屋を号とする雑貨商を兼ね、

いわゆる農間渡世であった。鈴木家は、七代三郎兵衛の代に財をなした。20 歳で父（六代伊兵衛）を亡くし、34 歳で妻を亡くした三郎兵衛（後伊兵衛襲名）は、再婚もせず、質素倹約を旨とし、刻苦精励して鹿沼宿有数の商家となった。また、読書を好み、易にあかるく、家に「数百千巻」の蔵書があったという。

鈴木家には、仲町に住し鑽益（さんえき）…蘭汐（らんせき）…俊益と続く医と文をもって知られる別家筋があった。七代伊兵衛の妻は、蘭汐（与右衛門）の妹である。蘭汐は、当時高名な儒学者伊藤三兄弟（伊藤仁斉の子東涯、梅宇、蘭嵎（らんぐう）とつながりがあるほどであった。鈴木家には、嵐雪（らんせつ）門の口伝や選評の巻紙など、俳諧に関する記録が残っているが、それらに見られる雪門の嵐汐（らんせき）は、蘭汐と同音で、嵐雪の一字をかりた蘭汐の俳号とも考えられる。いずれにしても、鈴木両家は、近世中期の地方宿場町としては、数少ない高い文化を持っていた。

財をなした七代伊兵衛は、僧籍に入って自称と称し、わが子の教育に力をそそいだ。長男は早世し、一人っ子となっても二男の四郎兵衛に対するしつけ・教育は厳しかった。儒学の教えを 10 歳に満たない幼児に強いた。一方、四郎兵衛の亡き母の兄蘭汐も、その教育にあずかって力あった。厳格な教有も、祖母美代子の暖かい慈愛によって、四郎兵衛をいじけさせることなく、学問への心を専一にさせたのであろう。20 歳ごろには、学力で父や伯父と肩を並べるまでになった。

自称は、己の力で家を宿内有数の商家としたが、家の格は、あくまで今までと同じく、一介の農（百姓）にすぎない。財をなし、次に目ざすものは家格をあげることであった。しかし、（村）役人である名主・年寄の階層には、その頃では力があってもなかなかなれない封建の世であった。それを打破するのは学問の力だ、と日頃学問に親しんでいる自称の考えの行きつくところとしては自然のなりゆきであった。

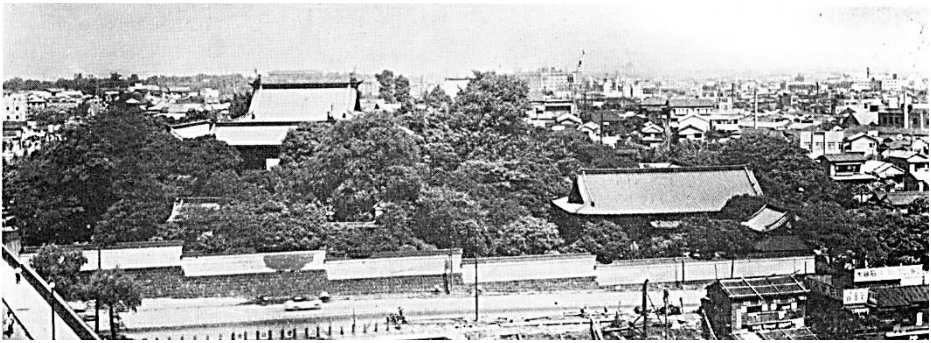
自称の住む石橋町から下材木町にかけては、鹿沼宿の旅籠（旅館）の半数が集まり、殊に自称の 4 軒南には、公用の旅館である本陣があった。鹿沼宿は、日光西街道と例幣使街道の宿場である。江戸や上方（かみがた）の文化の息吹が最も感じとれる町内という環境でもあった。自称は、四郎兵衛を江戸に

遊学させることにためらわなかった。また、その目ざすところは、時の最高学府昌平黌であった。自称は、四郎兵衛には既にそこに入学出来るだけの学力を取得している、と確信していた。

昌平黌は、将軍綱吉の命により、林鳳岡（ほうこう）の手によって、元禄 4 年（1691）、江戸湯島（現文京区湯島）に移されるとともに、幕府直属の学校となり、主として旗本とその子弟の教育が目的で、朱子学を正学としていた。享保 2 年（1717）から庶民の聴講が許され、その頃から、民間の学派（荻生徂徠（そらい）など）の勢いに押されて昌平黌は衰退期に向い、そのためか、大名や黌関係者の紹介があれば庶民でも入学出来るようになった。その時期、安永 6 年（1777）9 月 10 日に、24 歳の四郎兵衛が入学出来たのである。四郎兵衛は、庶民（農）として、昌平黌に入学出来た最初の人物の 1 人であった。

四郎兵衛入学の際の紹介者は、江戸の人（上野国の出ともいわれる）関永一郎である。修齢とも称し、字（あざな）は君長、松窓を号とした。黌の長である林鳳岡（ほうこう）の高弟で、昌平黌では相当の実権を有し、庶民の入学者も数多く紹介している。陽明学の影響を受けたがためか、寛政異学の禁の際に追放になったらしい。享和元年（1732）に、70 余歳で亡くなっている。四郎兵衛の思想形成に少なからず影響を与え、四郎兵衛帰郷後も 2 人の関係は続いていた。

実力主義が徹底している昌平黌は、学力のあるものは早く進級出来た。四郎兵衛は、学業途中、半年もるいれき（結核性リンパセン炎）を患いな



昌平坂学問所全景
寛政 11 年（1799）の建築を昭和 10 年に復元した建物の昭和 35 年頃の様子

がらも、一日も勉強を怠らなかったという。24 歳で入学した四郎兵衛は、安永 9 年（1780）2 月、27 歳で仰高門講授にまで出世した。黌生でありながら、一人半扶持の手当を受けた。仰高門とは昌平黌にある門の一つであるが、その門を入った中の学舎の舎名でもあった。当初、仰高門東舎では、仰高門日講として、一定の日を決め、随時聴講出来る特別講座をもっていた。後に、町の儒者や庶民まで自由に聴講出来るようになり、幕府文教政策の一環として、社会教化の施設ともなった。その講授は、林家がその筆頭講授の指名によった。四郎兵衛は、また、安永 9 年に、学舎の一隅に広業堂の集会を設け、詩文競詠の場とした。

当時、昌平黌に入学した黌生のうち、早ければ 3 年余で大名に仕官することが出来（別掲「升堂記」のうち「菅井慎次郎」参照)、四郎兵衛にしても講授になれるくらいであるから、大名へ仕官出来ないことはなかった。しかし、禄を求める心はなく、しかも鈴木家を嗣がなければならず、父自称の素朴な願いである家の興隆（家格を上げること）のため、帰郷することになった。天明元年（1781）のことであった。

帰郷した四郎兵衛は、その年、自宅の裏に私塾「麗沢の舎（通称りたくのや)」を開き、子弟の教育に尽力することになった。時に年 28 歳。「麗」は「ならぶ」の意で「麗沢」とは、隣あっている沼が互にうるおすという意で、友人が助けあって勉学に努め、人格を磨きあうたとえである。四郎兵衛の本名は之徳、石橋町に住んでいるので石橋を号とし、字を沢民と称した。「沢民」は「書経」の「沢、生民を潤す」から採ったもので、「麗沢」と名づけたそもそもは、己の字からも由来しているわけである。

石橋が、天明元年（1781）に開塾した「麗沢の舎」は、現在の中等教育施設にあたる。寺子屋などで、読み書きを一通り習得した子弟を対象としていた。教科書も中・上級の漢籍が中心であったと思われる。昌平黌出という石橋の名声から、入門者は、鹿沼宿内だけでなく、その周辺宿村や、遠く宇都宮町、今市宿、都賀郡南部、あるいは阿蘇郡などの各地にまで及び、内弟子（住込み)、通学生、通信生など、その形態もさまざまであった。門下生の一部を次にあげる。

大谷瀬兵衛　鹿沼宿屈指の旧家で、年寄役。（久保町）

細川主税介正義　　鹿沼宿出身、下野刀匠界の最高峰で、津山藩御番鍛治。（麻苧町）

舟越良弼（棋水）　古賀志村割元名主北条伯嘉の子で、鹿沼宿の舟越家を嗣ぎ、門下生500余人といわれる剣術家。書・画・歌もよくする。

北条伯救（文治郎翠峨）　古賀志村割元名主で、良弼の甥にあたる。書・画・歌をよくし、兵学もおさめた。

島元鷹（文翼）　宇都宮町から内弟子として入門し、昌平黌に学ぶ。帰郷して麗沢の舎の代教となる。

蒲生君平　宇都宮町の商家（油屋）の出。

青木保高（条右衛門）　下南摩村組頭で、造酒・質の農間渡世を営なみ、後に名主になる。

大橋静庵（善兵衛）　今市宿で酒造業を営なみ、本陣・名主・問屋を兼務し、静庵塾を開く。

木塚貞斎　嘉右衛門新田（栃木）の眼科医。

高田俊貞　内弟子。都賀郡で医師となる。

須藤仲比　越名河岸（佐野）の回船問屋で名主も勤める須藤柳圃の子。越名河岸へは、石橋はたびたび訪れて出張教授をしていた。石橋の妻は須藤一族から来ている。

山崎観純（尚志道人）　佐野天明郷尚志堂塾をおこし、儒学・剣術を教えた。

峰岸休文（菁峨）　水代村（現大平町）で蜂岸塾を開く。勤皇の志士を輩出した。

麗沢の舎の教育程度が高かったことは、結果的には、宿村の指導者層の教育養成機関的性格を持つこととともなった。右にあげた門下生の顔触れを見れば、その一端を知ることが出来よう。

石橋は、門下生たちの個性を適格につかみ、それを伸ばすことに意を用いた。石橋の古詩「莫逆歌」に、よくそのことを示している。「莫逆」とは親密な間柄をいう。

（島）文翼、資質、常に黙々として、終年、かつて喜慍（憤り）の色

なし。性、ただ眠を貪(むさぼ)りて求むるところなく、三竿(かん)（朝おそく）、初めて起きて日に晏食(あんしょく)（遅い食事）す。（しかしながら ）国家の故事と朝廷の儀、少小（年少の頃）の記得（習得）により胸臆(おく)（胸のうち）にあり。

彦平（蒲生君平）、為人(ひととなり)、祢衡(でいこう)（魏(ぎ)の人）を慕い、劇譚(げきたん)（はげしく話す）しても事情に迂(とお)く管せず（かけ離れて見識をせまくしない）。燕雀(えんじゃく)は知らず、鴻鵠(こうこく)の心（小人は大人物の心を知ることは出来ない）人々は指して笑い、狂生と称す。

（須藤）仲比、謹慎して家規を守り、貨殖の麻貯（消費と貯蓄）に時を失わず。

雲竜寺にある石橋の墓表には、

人となりは温厚明敏、博文にして篤行、家を治むるに厳を貴ぶ。而(しこう)して、その物に接するや必ず恕(じょ)（おもいやり）に本ずく。

とある。また、石橋は、昌平黌の正学である朱子学を修めた、いうなれば幕府体制派学者でもある。このような石橋の下(もと)から、行動的であり、尊皇論者である蒲生君平や蜂岸休文などが、なぜ生まれたのであろうか。

休文は、鍋(なべ)山村（旧寺尾村、現栃木市）に生まれ、麗沢の舎を出た後、江戸や長崎に遊学し、医術も修め、志士のパトロンであった水代村（現大平町）の名主田村治兵衛を頼り、医を開業するかたわら、峰岸塾を開いて子弟を教育した。その門下生に国分義胤(よしたね)、川連虎一郎(かわつらとら)、松本暢(ちょう)等がいる。国分は、尊皇攘夷(じょうい)論者として活躍し、維新後は山形県参事などを勤め、また、学校や医院を各地に設立している。川連は、江戸に出て、尊皇攘夷論者で下野に関係ある大橋訥庵(とつあん)の教えを受け、水戸の藤田小四郎等と交わり、関宿藩郷兵の教頭となったが、水戸天狗党に関連して江戸で殺された。松本も尊皇攘夷論者で、壬生藩に仕え、後に脱藩して京都に行き木戸孝允等と親交を結び、維新後、大審院勅任判事となる。

蒲生君平は、麗沢の舎に約 5 年間在塾した後、江戸に出て水戸の藤田幽谷などと交わり、国防への関心を深め、尊皇論に傾倒し、その所在が忘れられている山陵（天皇の墓）の調査を行って「山陵志」を著した。「山陵志」は、宇都宮藩に大きな影響を与え、幕末には藩として山陵修補に当たることとなった。君平は、群馬県の高山彦九郎と、仙台の林子平とともに

「寛政の三奇人」としても有名である。

君平や休文等が石橋から受けた感化は、ひとり学問の点だけでなく、思想形成の上にも大きな影響を及ぼした。それは、石橋の学んだ学問が昌平黌で受けた朱子学の枠をはみだし、国史に対する強い関心を抱き、陽明学へ深く傾斜していたからに外ならない。

君のため　国のためとし思はずば
　雪や蛍をなににあつめん

これは、14 歳で入門した君平が、翌年、学問の根底に忠君愛国の思想があることを詠んだ歌である。当時の石橋の感化が、君平のこの歌となって表れたのであろう。

石橋が、安永 8 年（1779)、昌平黌時代に書いた「擬太閤檄朝鮮国王文」（豊臣秀吉が朝鮮の役の際に朝鮮国王に対して出した通告文を模したもの）に、

我すなわち万古一世、王統絶えず、あえて侵す者なし。……

と、国体の精華を説き、また、天明 2 年（1782）には、日本三古碑のうち、宮城県の多賀城碑と、群馬県の多胡碑の碑文を考証して「古碑考」を稿している。なお、三古碑の残りの一基である那須国造碑は、後年、弟子の君平により「那須国造碑考」として補完されている。

石橋が、また「下毛国史」の編さんにとりかかったり、大部の「大日本史九三巻」の写本を完成していることなど、国史に対する強い関心を示す一証左と言えよう。石橋の橋本「三余慢筆」には、著名な儒学者太宰春台の国史に対する基本的な考え方の相違をついている。そして

国初とは何や……日本はひとり神武のみ。人あるいは之を知らず。以為（思うに)、鎌倉頼朝、足利尊氏皆国初の君と称すべきなりと。……

とあって、江戸開幕を国初となす風潮の非をついている。

石橋の国体の精華の強調は、その後の君平に強い影響を与え、前記したように、君平の山陵の調査や、国防策の建言に発展していった。

門下生へ、もう一つ強い影響を与えたのは、石橋の陽明学への傾倒である。陽明学は、知行合一（言行一致）を説き、朱子学の知先行後に対する批判から生まれた。幕末の志士に陽明学を実践したものが多かったのは、

陽明学は実践を重んじることを第一義としていたからである。石橋の門下生に行動派を輩出していることも、やはり陽明学との関連を考えさせられる。石橋の書に

言うべきか、行うべからざるは君子言わず、行うべきか、言うべからざるは君子行わざるなり。

とあり、実行出来ないとわかっていることは君子は絶対に理論をあげつらわない。理論の裏づけのないものは君子は絶対に実行しない、すなわち言行一致を意味している。また、理論を道徳に置きかえても、その意は通じる。

石橋の言行一致・知行合一の精神は、天明3年（1783）に始まる天明大飢饉（ききん）に対応する社会救済事業として実践されていった。

享保・天明・天保の三大飢饉（ききん）のうち、その最大のものは、天明3年（1783）から同7年にかけての天明の大飢饉である。殊に、東北地方は餓死者が続出するなど、その惨状は目も当てられぬほどであった。

天明の飢饉は下野をも例外とはせず、前年からの不順な天候は、天明3年春の低温、長雨と続き、時には雷雨と氷雨を交え、旧5月からは浅間山の連続的噴火、降灰も始まり、旧6月（真夏）に入っても気温は上らず、冬の着物を出して着る始末であった。この異常な低温と長雨は、稲の成育を悪くし、病虫害をも発生させていった。7月7日には浅間山が大爆発、下野まで響く大震動とともに砂の雨を降らせ、7・8月の豪雨により鹿沼では黒川が氾濫し、このような天変地異の連続は、人々を恐怖におとしいれ、8・9月の冷害によって稲の不作は決定的となり、その出来は、東北地方では皆無、鹿沼地方では約3割とみなされた。

不穏な世情は、同年9月に栃木町で打ちこわしを引きおこし、鹿沼宿でも10月15日に今宮境内に1,000人の宿民を集め、出向いて来た奉行所手代に年貢減免を要求している。当時、鹿沼宿を領分としていた宇都宮藩は、宿民救済の一機構として「救民録方」を設けていた。天明3年7月7日、奇しくも浅間山大噴火の当日に、鈴木石橋は「救民簿（救民録）」に序文を書いている。

……我が太守（藩主）の救民簿を結ぶ、要は民を救うを期するのみ。

しかるに……商賈（商人）の利に走る徒、これに乗じて利を射る……

また藩中の支出（経費）について

右は救民の本意にあらず。しかれども仕来(しきた)りの由、遣し申し候

といずれも救民策について、従来の運営の仕方に疑問をなげかけている。

10 月の今宮徒党一件など、鹿沼宿内外は騒然とし、窮民対策は一刻の猶予もなかった。明けて同 4 年正月、石橋の父自称が中心となり、とりあえず宿内裕福者から、1 人金 1 分以上 5 両以内を取立て、4 カ月分計金 50 両（内町分）を窮民に配分する方策をとった。鹿沼宿内町でその配分を受けた窮民は 360 余人、1 人につき 300 文か 200 文、子供へは 100 文であった。その後、藩はその方策を踏襲し、引きついでいった。自称・石橋親子による窮民対策は、「救民簿」本来の性格にもどり、石橋の社会救済事業は「救民簿」の当事者として出発していった。

田沼時代の放漫財政と賄賂(わいろ)政治は、天明の飢饉と米価騰賞による国情不安により行きづまり、新たに老中首座となった松平定信によって、天明 7 年（1787）から寛政の改革が始められた。その農村対策の重点施策として備荒貯蓄がおし進められた。

石橋も独自に備荒貯蓄（穀）の方策を立てた。天明の大飢饉も終りを告げ、当座の窮民救済に一息つくことが出来た寛政元年（1789）の年である。備えあれば憂いなし。石橋の凶年に備えて貯穀する方策とは――1 戸 1 日 1 文の義援金を集め、これを米に換え、さらに穀屋に貸して利米を得、凶年にはこれを放出して窮民救済に当てることであった。篤志寄付を加えて 100 日で米 100 俵となり、利米を加えて 2 年間で米 500 俵に達した。

この備荒貯穀の効果は、早くも 2 年後の同 3 年に現われた。8 月 5 日に下野一円を襲った大風雨は、田園に大被害を与え、米価は騰貴し、宿民はまたまた困窮した。よって備荒米を毎戸 1 斗ずつ放出し、さらに石橋は、それに私銭 300 文を添えて与えた。その記録をとどめたものが「賑窮簿」である。寛政 12 年（1800）正月改分には

一、古綿入一つ		金七母
一、同　一つ	米五升	五郎左衛門母

一、同　　一つ　　米　　勘六
一、同　　米　　勘五郎坊
一、米五升　　如来堂　与八
一、同五升　　上横町　与八母
一、ふとん一つ　　田町上　藤衛門
（以下略）

とあり、最後は辛卯（かのとう）（天保 2 年）春となっている。天保 2 年（1831）は石橋の子松亭の没年でもある。石橋は文化 12 年（1815）に死去しているので、「賑窮簿」は松亭に引継がれて実施されていたことがわかる。

近世農村の悪風である堕胎、間引き（乳児殺し）は、天明の大飢饉以来殊に顕著となり、石橋は、窮民救済・備荒貯穀とともに、その悪風根絶にも力を尽した。子供を育てる資力のない者に、夏冬の着物と毎月米 5 升と銭 500 文とを与え、場合によっては子供を引取って養育もした。石橋により扶助を受けた者 500 余人、よるべのない養育者数十人を数えた。石橋は、この間の事情を稿本、「惻隠余情」に精しく記述し、儒教にもとづく道徳観から説きおこしている。惻隠とはあわれみいたむの意で、「孟子」に「惻隠の心は仁の端（＝端緒）なり」とある。その序文に、

孔子曰。父子之道天性也。蓋道其父子思愛之流出於天性自然也。……

とある。石橋は、「惻隠余情」の漢文体とは別に、国字解の稿本を作成している。右の序文については、

人ノ父子ノ道ト言フモノハ、天ヨリ受得テ生マルルナリト。蓋（ケダ）シハ疑ノ辞、スイリョウスルニト訓ズ。父ノ子ヲ愛シ、子ノ父母ヲ慕フ事ニテ、天ヨリウケタル自然ノ性ヨリ出ルモノナリト。……

と解釈し、恐らく版本として発刊する意図をもっていたと思われる。堕胎、間引きへの対策と、稿本「惻隠余情」は、後世、福祉関係、人口問題の貴重な資料として高く評価されるようになった。なお「惻隠余情」は、寛政 3 年（1791）の成稿と思われる。

同 4 年 7 月 16 日、父自称は 68 歳で死去した。石橋は「礼記（らいき）」にのっとり、13 カ月間喪に服して墓参のほかは外出せず、3 年間肉食とタバコを絶った。

日常生活に道徳方面を重視した石橋は、孝子を顕彰することにより風俗を美化し、儒教の修身斉家の道の第一歩を実践させることを意図した。寛政 12 年（1800）に稿した「三孝子の記事」がそれである。その序文に、

……千載の下、これを読む者、ただこの孝子あるを知るに非ず、又、時の君の能＜徳を好み善を褒むるを知り、又、もって士庶人の志を励ますに足るを知るなり。これ一挙にして三善を得るなり。……

とある。稿本も 2 種類あり、その違いは三孝子のうちの一名が異なっている。そのほかに「三孝子画本」がある。稿本、画本とも版本を意図していたらしい。あるいは、画本は稿本の挿絵の予定であったかも知れない。宇都宮藩は、善行者の顕彰を行っていたが、石橋の推薦により、三孝子はいずれも表彰されている。

鈴木石橋がとりくんだ窮民救済、備荒貯穀、堕胎間引きの悪風根絶、孝子の顕彰などの社会事業は、遠近に知れわたっていった。江戸の作家で「南総里見八犬伝」の著者滝沢馬琴も、その著「蒲（がま）の花かたみ」で、

……関東いたく飢えるとき、倉をうち開き、四百たわらの米を散じて郷党隣里をにぎわしけり。ただこの施行のみならず、あるいは路を造り橋をつくろい、隠徳慈善を旨としければ、人皆徳とせぬものなく、名をおちこち（遠近）に知られてけり。

と、蒲生君平の師としての石橋について書いている。

宇都宮藩も、寛政 12 年（1800）には、石橋に五人扶持（ふち）を与えて士分の待遇をし、その学徳をたたえて講学のための登城を要請している。

鹿沼駅　鈴木四郎兵衛

数年来、心掛けよろしく、町内の風俗まで常に教諭行き届き、御満足におぼし召し候。もっとも、折々登城仰せつけられ候儀もこれあるべく候間、その旨相心得べく候。

閏（うるう）　四月朔日（ついたち）

翌年、文人でもある藩主戸田能登守（のと）忠翰（ただしなか）は石橋を城中に招き、藩士とその子弟に書を講ぜしめた。それから、月に 3 回、二の丸御殿大

書院での講書が恒例となった。家老間瀬保義は、石橋に自分の屋敷の一室を与え、学問だけでなく、時の政務についても意見を徴して関与せしめていた。

当時、宇都宮藩では、石橋に私淑していた執政（家老）本多世義は藩学を興すのに力をそそぎ、それに協力して石橋の弟子の君平は、享和 3 年（1803）に、大学頭（かみ）林述斎に次のような上書を提出している。宇都宮藩には石橋という名教授がいるのに、藩校がない。藩の文教政策をなお一層拡充するために、家老と共に藩校を設立することを謀っている。

藩校「修道館」が創立されたのは、石橋が亡くなった年（文化 12 年＝1815）であるが、石橋の出仕していた頃は、藩の文教政策が重視されていた時代と言うことが出来る。

文化 5 年（1808）春、石橋は足の病気の再発で歩行不能となり、藩士への講学が出来なくなってしまった。石橋は、出仕の辞退を願い出たが聴き入れられず、そのかわり、城中に一室を与えられ、そこに駕籠に乗って出入りすることが許された。石橋に与えられた特権――藩主以外には許されない駕籠での出入りは、石橋の学識、人格の高さを物語っていると言えよう。

しかし、文化 9 年の夏、講学中に石橋の病状が悪化し、激しい痛みに堪えかね、許可を得ないで鹿沼に帰り、再び出仕することはなかった。自ら閑（間）翁と号し、専ら療養に専念した。

それより先、享和 3 年（1803）の元旦に、石橋は「五十歳春」と題して七言絶句を詠んでいる。

知命にして始めて易の象徴を知る。また知る、天道の是か非かを。
新年待ちて得たり梅花の信。ただ見る、天に先んじて天違わず。

知命（50 歳）になって、始めて易のなんであるかを知った。善いことをすれば福を得、悪いことをすれば禍を得るのは天の道とされている。しかし、世間は必ずしもそうとは限らないので、天道の是非が疑われているが、このことについても納得することが出来るようになった。新しい年を迎えると、待っていたかのように梅花のおとずれがある。これは人間の生まれる以前からの現象で自然の道であり、これまた天道であり、いささか

のくるいもなく毎年くり返される。この自然のありのままの姿と、是非が疑われている人間のありのままの姿、その組合せに、石橋は易の象徴を見ることが出来たのである。

もともと、占いの書である易は、陰と陽との結合の変化によって万物とその現象とを説明し、後に人生哲学の書となっていったのであるが、石橋は、易を、たんに儒学の教典としてだけでなく、また占いの実用的価値からだけではなく、そこから安心をくみとるべき哲学の書として取りくんでいくことになった。そして、10 年後の文化 10 年（1813）に「周易象儀」20 巻を脱稿した。藩儒として宇都宮藩に出仕し、また持病である中風に悩まされながら、全身全霊を打ち込んだ石橋終生の労作となった。時に石橋 60 歳、七言絶句の一詩がある。

六十の星霜、六十の化。稍（ようや）く知る五十九年の非。ああ老たり、悔を由（ただ）すなし。しかず、吟哦（ぎんが）（詩をうたう）して世機（世の中のからくり）を忘れん。

また、君平をその年に亡くした石橋は、愛弟子の死を歎き悲しんで五言律を手向けている。

蒲生君平を哭（こく）す（歎き悲しむ）

国家棟撓（とうぎょう）（ぐらつく）の時、孤柱の力支え難し。王威（徳川幕府）麟趾（りんし）（盛んなこと）を思い、宮城の黍離（しょり）（荒れたさま）を歎く。激昂（げきこう）（憤激）して世態を忘れ、憤発して生涯を送る。九志（九つの歴史書）千秋の恨み（九志のうち山陵志と職官志以外未完)、衆人すべて知ること少なし。

その 2 年後、文化 12 年に石橋は没した。行年 62 歳。葬儀には藩主戸田忠延の使者をはじめとして 400 余人が会葬し、盛大に執行された。法号は「礼譲院文誉覚叟沢民大徳」と贈られ、雲竜寺に埋葬された。2 年後、水戸藩儒で彰考館総裁の藤田一正（幽谷）が墓表を書いている。その文末に、

儒学、師徳相兼ねる者、あるいは少なし。教の行われざる所以（ゆえん）なり。先生の徳と学と、かくのごとくして閭巷（りょこう）（民間）に棲遅（せいち）（官に仕えず野に住むこと）す。古を稽（かんが）うるの力（学問)、物をすくうの功（社会事業）

豈(あに)、ひとり郷里の善人と称するのみならんや。
とある。なお、石橋は、大正 13 年に、社会事業への功績に対し正五位が贈られている。

石橋の遺稿の主なものは、（分野別に）儒学では、周易象儀・深衣図説・左伝凡例考・女孝経等。歴史では、古碑考・下毛国志・紀異篇等。社会では、惻(そく)隠余情・三孝子の紀事・余粮(ろう)篇等。詩文では、三余漫筆・石橋文集・石橋詩稿等。紀行文では、那須温泉紀行・伊勢紀行等である。また、その蔵書は麗沢舎蔵書として、享和 3 年（1803）には既に 38 の書箱を数えることが出来、石橋死後の安政 2 年（1855）には 76 箱に増えている。昭和 39 年にその蔵書 5112 冊は、遺著遺稿 127 冊と共に、市の文化財に指定されている。

③　前号の続き

蘭華第八号「鈴木石橋先生」より
（栃木県立鹿沼高等女学校校友会・昭和 12 年 1 月 10 日発行）

◯先生江戸遊学に上る

さて此処に先生江戸遊学の事に入るのであるが、此処にも尚幾多の未解決の問題が蔵せられている。即ちその時及び遊学の年限等はもとより、更にその当時の昌平坂学問所の状態等共に我々の興味をそそる問題である。

碑文はただ「少(わか)くして江戸に学び、昌平学舎に入る」と録せらるるのみで、何等この間の正確なる時代を教えない。これによってただ「少くして」という文字のみに拘泥すれば少年期なるべしと想像される。亦現今迄殆んど誰もその文字通り正直に考えられていた。然し天明 2 年先生 34 歳の著述になる勧学文には「弱冠にして笈を国学に負い」と録せられている。弱冠は男子二十歳の称であり、少くとも 20 歳前ならざる事は明かである。然らば 20 歳か？　然し我々はその言葉が必ずしも正確なる年齢を意味せず、概略的な時期である事は次の文を読む事によって判明する。先生の安永 9 年庚子の著述になる「日光奇賞論」には「余国学に遊息する事今に至って 4 年なり」とある。安永庚子の歳は先生 27 歳であるから、そ

の数え方によって 23 であるか、24 であるか、その何れかとなり、可成り正確となって来る。更に先生の遺稿中、先生がその弟子諸葛子側と廟堂を論ぜる書を発見せり。その文中巻頭に「安永丁酉の歳を以て国学に遊ぶ」と明記せられており、安永 6 年則ち先生 24 才なる事が決定せられる。以上の考証によって先生の出発は 24 才という事になる。

又その在学年限則ちその帰郷の年を知る事は先生の在学修業の程度を知り、進んでは開塾の年を決定する重要な事であるがこれ亦遺憾ながら判然していない。現今迄信ぜられている帰郷年齢は 26 歳となっており、果してこれが真実とすれば、その在学年限は僅かに 2 年、余りに短きに過ぎ、碑文に載せる「迎高門の講授」云々という事実が甚しく基礎薄弱となる。念うにこれは先生 26 歳の著になる伊勢紀行の文中に「余安永己亥の年鹿沼に帰り」云々という文をそのまま解釈せし事の誤信なるべく、その帰郷が業成って帰郷せしものに非ずして前出「送関永世文」中の「偶々帰省する事あれば」云々と同意義に使用せられている事に気付かざりし結果であろう。その遺稿を散見してもその後先生は卒先して校内に広業堂の会を起して何時もこれに出席し、又校生を指導している。これと同様に先生 27 歳の著になる日光紀行中にも「余安永庚子の秋を以て鹿沼を省し日光に遊ぶ」とあり、勧学文にも「弱冠にして笈を国学に負い、数年にして還る」とあり、少くとも 5、6 年間の在学と見る事が至当の様に思われる。5、6 年間の期間であれば先生は既に故郷に於て家翁の薫陶を受くる事久しかりしため、迎高門講授云々というその著しき身分上の発展にも何等の矛盾がない。此処に先生の最初の門人であった佐野の須藤仲比に与えし書がある。その文中に「辛丑帰省、足利に遊ばんと欲す。道に足下を過ぐ」と書せられ、先生の遺稿中未だ辛丑以後帰省云々の字句を発見しない。辛丑は先生 28 歳に当り、在学の期は 5 ケ年と言う事になり、大体前後に矛盾がないようである。故に今仮に先生の在学を 5 ケ年、出発 24 歳、帰郷 28 歳としておく事とする。

而らば此処に問題となる事は何故に既に 24 歳を数える先生が故山を後にして遠く江戸に学んだのであろうかという事である。父 1 人、子 1 人、而も倚門のわびしき孤独を嘆きつつ寸時もその側を離れざらんとする祖母

を後にして……。24 歳と言えば一人前の立派な男子である。早婚の風の著しかりし当時の事とて、既に家翁の膝下に於て学成り、年齢も長ぜし先生は、土地の豪農の風習に従って妻帯し、漸く一家の経営を委任されんとする年齢である。我々は此処に暫く疑問の眼をしばたたかねばならぬ。念ふに家君は此の子の非凡にして孜々として倦まざる向学心を見、徐ろにその円熟を期し、自己の教育不足をして天下の賢才高徳に任じてこの子の偉大なる進歩を庶期し、且つは稍々ともすれば井底の蛙大海を知らざる自己増長を転換して真に邦家郷党の有為の人材たらしむるため、可愛ゆき子には旅とやら、離し難き掌中の玉も有すれば損するなり、一大勇猛心を奮起して遊学を命ぜしものであろうか。又先生の側から考うれば、学業徳行愈々進み、自己の未知世界への止むに止まれざる欲求は、進んで大学の門を敲き、聖賢の教の前に佇まんとして父翁に嘆願せしものであろうか。共に我々は暫く此等に眼を閉じて先生の記録を探してみよう。

勧学文には「余は家君の命により、弱冠にして」云々と明記せられ、先出の須藤仲比に与えたる書中には「徳材は駑、（中略）幸に家君の余業に頼りて黙々として読書せり。自ら息う事能わず、即ち国学に遊学し頡頏碩宿の際、万に大海の一滴を酌めども、以て自ら喜ぶ」と書せられている。この両文は共にその一面を物語るもので、家君の命、自己の止むに止まれざる希望はやがて先生の東都遊学となって実現したのであろう。

実に勉学に故山を後にするものこの心掛けを忘れてはならない。ともすれば何等の目的もなく、ただ射幸心に駆られて東都に客遊するものの多きを加うる今日、この親、この子の決心は実に堂々たりと言うべきである。「学をなすに三要あり、志なり、勤なり、好なり」その遂げんとする志、これを目賭して日々怠らざる勤、進んではその学、その業を三食同様に好するという心掛けを失すれば、その大成は期し難い。

◯所謂学問すること

此処に又注意すべき事は昔の所謂学問する事と、今の学問する事との間に著しき相違を発見する事である。即ち洗い晒しの紺絣に小倉の袴、肩に振り分け荷を捌き、足に草鞋を噛ませた若人が、過ぎ来し方遥か故郷の山川を顧みて、行手遥か青雲の彼岸に志を馳せつつ吟ずる「男子立志出郷

関、学若無死不還」云々の学である。この時の学とは学問研究の為めでもなければ、学徳兼行でもない。ただそれは立身出世の手段としての知識一般の謂であり、学成るとは所詮成功利達の謂である。然し先生が遥か故山を後にして学に志し、東都に遊学せしは全く学徳兼行で、学んで道を知り、修身、斉家、治国、平天下にあった。即ち少くとも徳川時代の朱子学派は学を成す事と、徳を積む事とは共に学問する事で共通であった。稍ともすれば現今物質文明の流入と共に、この学問の大理想が省みられず、この両者が分離しつつある事は返す返すも残念である。この事は更に朱子学の項に於て述べるであろう。

○当時の昌平坂学問所

昌平坂学問所は一名聖堂とも称し、有名な徳川初期の大儒藤原惺窩の門人林羅山が3代家光の侍講となり、寛永7年12月上野忍(シノブ)ケ岡に邸宅5000坪及び金200金を賜わり、書院塾を建てたのがその起りである。寛永9年には尾張義直この地に孔子の廟を祀り、4代家綱は寛文3年之に弘文館の名を与え、同6年規約を作って経学、史学、詩文、博読、皇邦典故の5科を設けた。更に5代綱吉の好学は益々この学舎を発展せしめ、羅山の子林鳳岡に弘文館学士の号を与え、自ら出でて学を講ずる熱心さを示した。かくて林家の私塾にすぎざりしこの学舎も元禄3年、本郷湯島坂上6000坪の地に移し、昌平坂学問所と改称し、翌年聖廟落成し、2月釈典を修し、林信篤が大学頭に任ぜられたのである。林家は代々祭首として大学頭に任じ、聖廟を管理し、その家塾は幕府の支配を受くる事となり、半民半官の学問所と変更された。その後の学運に盛衰があり、田沼閣老の執政時代即ち明和、安永年間は最も衰運時代であった。先生の遊学は宛もこの時期にして、祭首幼、都講専ら事を弄せし下剋上の気分が此処にも浸潤していた時であった。

当時の学制は詳でないが、寛政以前に於ては士庶共にその入学が許可せられた為め、先生もこの恩典に浴して入学せしものであろう。その学制、教科は寛政以後規定せられしものに余り遠からざるものと思われるので今此処に略述してみよう。

教科は経学、史学を中心とし、修学の次第は素読所、復習所、初学所、

講釈、会読、試業の6過程に分れ、四書、五経の素読から、左伝、国語、史記、漢書等の習読を前記の6過程に従って享け、又詩文の添削等も享けし如くである。又この外に御座敷に行わるる講義や、稽古所の定期1、6の日に行わるる講義、其他儒員、都講、学生等の日講とて毎日行わるる仰高門の講義等に列せしめられた。教員は林大学頭が総教で、その下に普通4、5人の儒員があり、生徒の教育を司り、之を輔佐する教授方出役とがあった。安永の頃は多分都講がこの教授方出役であったのであろう。学生は寄宿生活をなすものと通稽古をなすものとの2種あり、共に午前7時より正午迄稽古場に於て教授方出役の素読の教授があり、午後は夫々自由研究であった。3、8の日には同所に於て学生に講義せしめて之を試験するの
で、この時は相当厳しく反駁して充分その実力を試めされた。学問の充分進めりと認めらるる者は寄宿寮の南楼にて終日自由研究を許され、必要な指導が与えられていた。かくて春秋2度学問試験が行われて及落が決せられ、及落はその実力に比例し、実力の伴わざる者は従って多年を必要とした。現在の如く1年単位ならざる事、終業年限の一定せざる事等は共に興味深き事であり、従ってその学業進む事早ければ短日月で卒業する事が出来た。

かくてこの学舎の中心思想は経学であり、而も朱子学を以て中心とし、修身、斉家、治国、平天下を目的とし、独り学問の修業は知識のみに止まらず、その徳行の随伴する事を以て必須条件とした。孔子はかかる意味よりその理想として偶像化せられ、尊重せられた。入学者には必ず聖廟を礼拝せしめて然る後講筵に列せしめられた。仏教信者が釈迦を礼拝し、基督信者が基督を礼拝する如く、亦彼等は孔子を礼拝したのである。

先生もこの学舎に入学を許され、寄宿生活をなし、約5ケ年間研究生活を行ったのである。

○朱子学

昌平学舎の中心思想が経学であった事は前述せるも、更に当時の経学の中心を追求すれば、宋代に大成せられたる朱子学であった。我々は先生諸事業の中心思想がこの学より演繹せるものなる事を知るために側道ながら

朱子学を一瞥する事とする。

秦の焚書坑儒以後訓詁註疏の学と成り果てし経学も、唐末より漸く徒らに訓詁註疏に飽き足らず、他方仏教、道教等の深淵なる哲理に刺戟せられて、儒教の復古運動が企てられた。即ち訓詁学の章句、文字の末に走って、孔子立教の大精神を忘れ、又陰陽五行の説に浸潤し、徒らに旧説を墨守して寧ろ孔、孟の大精神に遠ざからんとする傾向に対する反動思想と言うべく、同様に各国歴史上に散見する復古思想の一種である。かくて宋代に入り周敦頤、程伊川、程明道、張横渠等の学者夫々新説をなし、最後に近世哲学に於けるカント、古代哲学に於けるアリストテレス等に対比さるべき儒教哲学の大成者朱子が出づるに至った。朱子学は実にこの朱子によって大成せられたる宋代の儒学というべきである。尚この機運の醸成に偉大なる刺戟を与えしものは仏教、老荘の思想であった。

朱子の根本思想をなすものはその宇宙論で、彼は周氏の大極図説を引用して、宇宙の本体は大極なりと仮定し、大極は理、気の二元を包含し、時空を超越し、無始、無終、永久不滅なるも、その窮極に於ては一個の理なりとし、巧にその分裂せんとする二元論を一元化せんと試みている。即ち本源的なる理概念の外に気概念を考え、宇宙の根源は理なるも、宇宙万象の変化百態はその気との混合の如何に依るものなりとし、宛もアリストテレスの質量と形式との関係の如く、亦は現今自然科学の単元説に似ている。

かくてその宇宙論より演繹せらるる人性論に於ても「性は理なり、心にあっては性と呼び、事にあっては理と称す」と述べ我々の心自身は尽く善なるも、往々悪人の出現するは所謂理より出てたる本然の性に非ず、気より出てたる気質の性となし、我々は修養の結果この気質の性を払い去る事が可能なりとしている。故にこの修養は極めて厳格を極め、恰も仏教徒がその戒律を遵奉するに似ていた。これ等の思想は仏数思想との止揚というべく、その修養法も亦これに倣いし所が多い。

我国にあっては朱子学は古学及び陽明学に先ちて起り、且徳川氏 300 年間の教育主義として学術界の根底をなし、幕学昌平学舎の伝統的な経典であった。幕府は斯学以外を異学と称し、その禁令をすら出すに至り、諸学

派紛争の中に於ても朱子学のみは一貫して優勢なる地位を保ち得たのであった。今井上哲次郎博士の所説に従って朱子学の長所を挙ぐれば

（一）朱子学は実行と学問、即ち修徳と研究と両者を兼ねて之を全うせんとする者である。故に道徳の一方のみに偏せず、知識の一方にのみ又偏せず、両者を合一して中庸を得んとする傾向にあり。之に反して陽明学派は道徳の実行に偏し、動もすれば輙ち知的探究を怠るの弊あり。又諼園学派の古学及び古註学派は往々知的探究を主として反って道徳の実行を疎んずる傾向あり。

（二）朱子学は実行と共に学問を尚ぶと雖も、その学問は実行のために要する所にして、実行を離れたる学問を尚ぶものに非ず。故に単に知的探究を主とするの弊なく、必らず修身の一事に帰している。即ち教育主義として最も穏健なる学派である。

是等謹厳篤実なる人格の主張を以て、その真面目とせる朱子学派が、慶長以来徳川 300 年の政教に資する所の大なりしは言を俟たざる所である。明治以来洋学の浸入急にして、本邦数育は全くその面目を一新し、朱子学の如きは殆んど棄てて省りみず只管洋学万能の時代となった。然し独り朱子学の主張する徳行の一点、学徳一致の主張に於ては永くその生命を失わず、必ずその復古せらるる時代のある事を信ずるものである。

○先生仰高門の講授に挙げらる

先生は故山に於て相当程度の実力を備えし 事とて、恐らく短期間にて一通りの過程を終え、自由研究に入りしものと思われる。26 歳にして「豊王」「伊勢紀行」等の大論文を著わせるを見てもその一端を窺うに足る。又先生の向学心と、家翁の熱意とは先生を駆って孜々として奮励努力せしめたに違いない。先生が須藤仲比に与えし文中に「頡頏碩宿の際 、万に大海一滴を酌めども以て自ら喜ぶ」と記し、亦碑文には「嘗つて瘰癧を患い、半歳を超えしも未だ嘗つて一日も書を廃せず、其の精苦此の如し」と書す。以て孜々として止まざる先生の勉強振りが躍如として髣髴せしめられるではないか。

「夫れ業は勤むるに精しく嬉ぶに荒む」「懶惰は生者の墳墓なり」「鉄は熱せる中に鍛うべし」「事の成ると成らざるとはその勤むると勤めざるとに

あり」螢雪の功空しからず、先生の進学は遂に衆目の認むる所となり、仰高門の講授に推挙せられたのである。仰高門は大学事務所から図書館に達する門で、元禄４年林信篤が始めて経を講ぜし事がその縁起にして、享保以後は学生又は儒員が毎日此処で経を講じ、之を日講と称した。当時祭首幼にして都講専ら政を弄せるため、一面に於て出世の早き者あり、著しく遅き者あり、学政頗る乱脈極りなかりし如くである。儒者は河越の人、井上蘭台に学び、後昌平校に多年寓してその著述も頗る多き関松窓であった。先生もその下に澤都講其他の都講と共に学生の指導考試に当り、学舎の一隅に廣業堂の集会を設け、詩文の競詠を行い、亦令義解会業約を設けて日本礼楽研究会を実施せし事も卒先して之に当りし者は先生であったようである。当時の先生の詩文は現存し、その表現は実に覇気に富み、其の技は円熟し、宛も韓愈の文章に接する如くである。

短信・会員消息

先日は「鹿沼に生きた人…」お送り下さって、ありがとうございました。

（中略）

鈴木石橋先生のお話は、北小に勤めていたとき同僚の先生からお聞きしていました。でもこんなにくわしく知ることができて嬉しいです。くり返しゆっくり読ませていただきます。

最後のページに旅クラブの予定がありましたのに大変残念でしたね。早く元のおだやかな生活ができますよう…がまんがまんでがんばりましょう。

お体に気を付けてお仕事お励み下さい。さようなら。

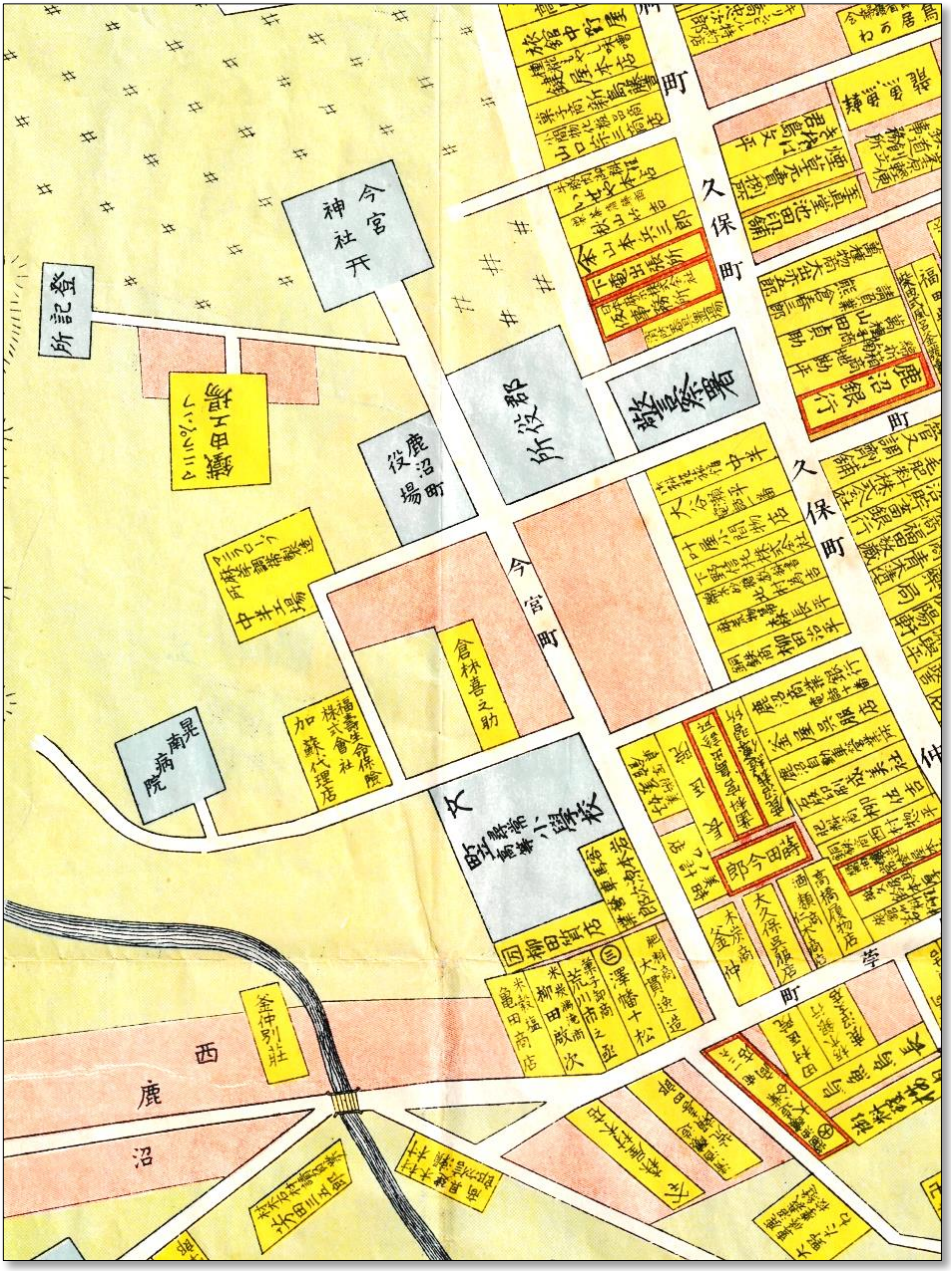
（大貫とし子）

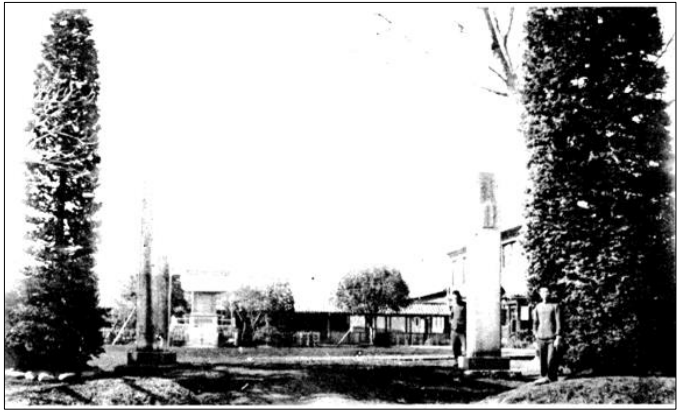
（大貫とし子氏は、阿部良司の小学校時代の恩師）

先生には、故辰郎氏の母校、西大芦西小学校の校歌をお預かりしております。鹿沼の校歌がまとまっている本は見つかりましたが、西大芦西小学校の校歌は含まれておりません。次号では、この校歌と、辰郎氏のご実家の写っている絵葉書を織り交ぜ、西大芦関係の絵葉書を紹介いたします。（阿部良司）

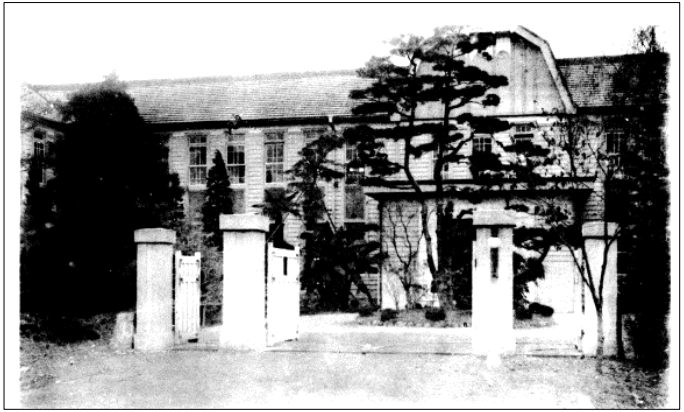
地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景

「鹿沼町商工名家案内図」（大正２年 11 月９日発行）より部分拡大図





栃木県立鹿沼農商学校



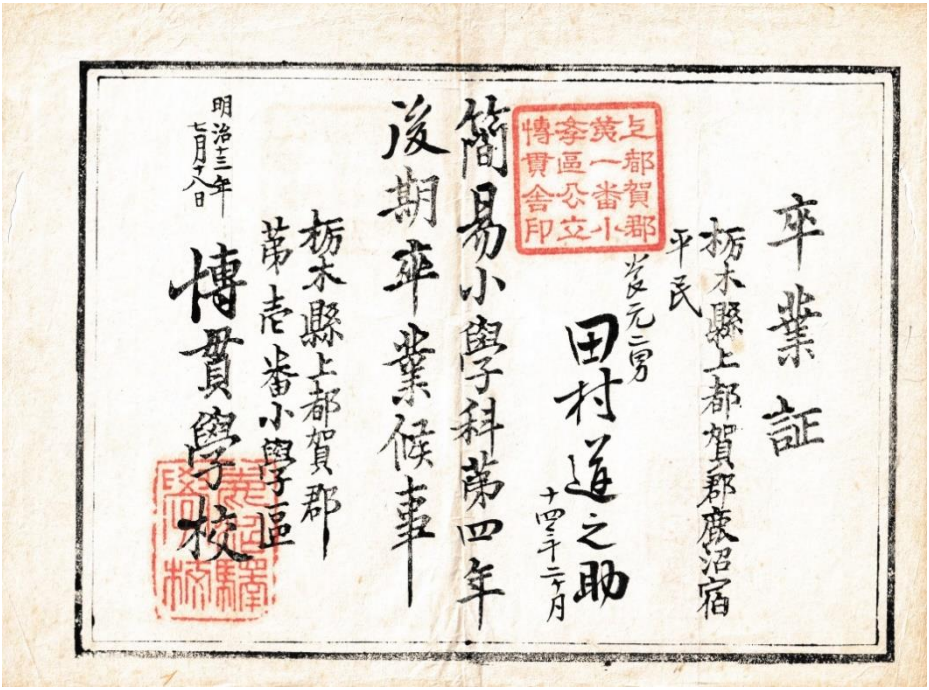
栃木県立鹿沼高等女学校

上都賀郡立農林学校田植実習

村役場にて朝礼

託児所勤務

栃木県立鹿沼高等女学校労務動員

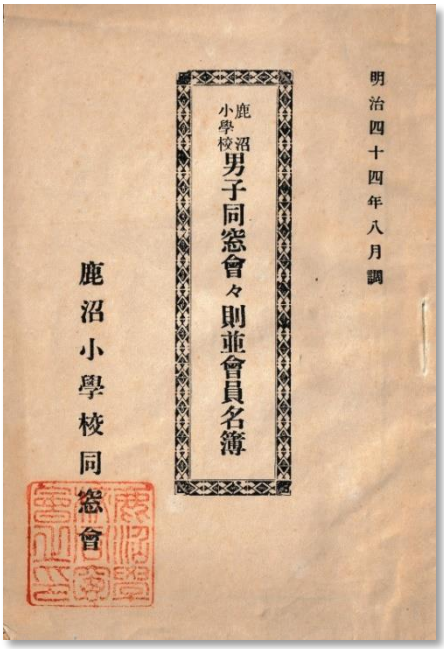

卒業証

栃木縣上都賀郡鹿沼宿
平民
安元二男
田村道之助
十四年二月

簡易小學科第四年
後期卒業候事

栃木縣上都賀郡
第壱番小學區
博貫學校
明治三年七月八日

↑博貫学校（中央小学校の前身）の卒業証書
（明治 13 年）


明治四十四年八月調

鹿沼小學校男子同窓會々則並會員名簿

鹿沼小學校同窓會

←「鹿沼小学校男子同窓会」会員名簿
（明治 44 年）
同窓会長として大谷瀬平の名が見られる

本号の内容

５分でわかる朱子学（朱子学と陽明学との違い）　・・・・・・・・・・・　２

かぬま郷土史散歩より　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

蘭華第八号「鈴木石橋先生」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

短信・会員消息　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景　・・・・・・・・・・・・・・・２５

鹿沼に生きた人、生きている本・第3号

2020年9月発行

小さな旅クラブ　鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人　阿部　良司

携帯　090－1884－3774

FAX　0289－62－3774

携帯✉shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail　tw244873@jg8.so-net.ne.jp